

調査要項

遺跡名(番号)	谷地城跡(321-051)
所在地	山形県河北町谷地
時代・種別	中・近世 城館跡
起因事業	河北町新庁舎建設
調査依頼者	河北町教育委員会生涯学習課
調査機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
現地調査	令和元年5月21日から8月16日まで
調査面積	2200m ²
調査担当者	主任調査研究員 天本昌希（現場責任者） 主任調査調査員 渡辺和行
検出遺構	溝状遺構、柱穴
出土遺物	陶磁器、漆器、木製品、古銭

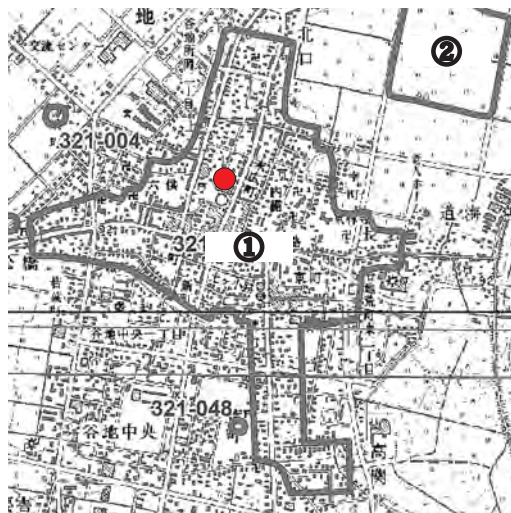


図1 遺跡位置図(1/30,000)

- ①谷地城跡（赤丸が調査区）
②大塚館跡

1 遺跡の概要

谷地城跡は、現在の河北町谷地の中心市街地に広がる広大な遺跡で、16世紀後半頃、中条氏、白鳥氏らによって整備された平城^{ひらじろ}です。本丸は現在の三社宮付近^{さんじゃのみや}にあり、ここを中心に複数の堀や土塁といった防御施設に囲まれて城下町が構築されたものと考えられています。谷地城の機能は、17世紀前半に廃城となり失われましたが、城下町としては残り、これを基礎にして現在の谷地の市街地は形成されています。

これまでの谷地城の研究は、残された文書資料や明治初頭の地図などから推定することで進められてきました。それらによると、今回の調査区付近は、本丸の外側の二の丸にあたり、堀や土塁が南北方向に巡っている場所と考えられていました（図2）。しかし、今回の発掘調査で、その南北方向の堀は見つからず、東西方向に伸びる溝跡や建物の柱穴などが多数発見されたのです。

2 遺構と遺物

今回の調査で発見された主な溝跡は、南側のSD2溝跡と、北側のSD3溝跡で、幅2～4mほど、東西に平行して伸びています。SD2溝跡は、途中通路を確保するためか、一部を掘り残している様子もわかります。西側で北方向に進む溝に合流し、SD3溝跡を横断するようなので、SD3溝跡とは時期差があるかもしれません。SD3溝跡は、SD2溝跡の北側12mほどにあり、SD2溝跡に比べやや幅も広く、深めのものとなります。調査区全体で検出された長さは80mを超えており、東側は調査区外へと更に伸び、西側は直角に折れ曲がり南へと伸びるようです。これらの溝跡の機能について、堀とするには幅が狭く浅いため、現在のところ、二の丸の屋敷地を区画するための溝と考えています。

これらの溝の区画内外には、建物の柱穴が多数発見されています。注目されるのは、その底に枝や割材をいくつも並べている様子です。これは建物の重みで柱が沈み込まないよ

うにするための工夫と考えられます。とはいえ通常、そのために用いられるのは、石や板などであり、今回の調査で見つかったような事例は、他にみつけれません。簡単に済ませるためだったのか、低湿な環境にはこのほうが適していたのか、今後の検討課題です。

出土した遺物を見てみると、皿や碗などの食器、ゲタやクシなどの日用品、お金、墓所に見られる石塔も見つかっています。これらの時代を見てみると、溝跡の底から出土するものは、概ね16世紀後半のもので、溝が埋まりきった高さで出土するものは17世紀の前半のものとなります。これは谷地城が機能していた時代とみごとに一致します。

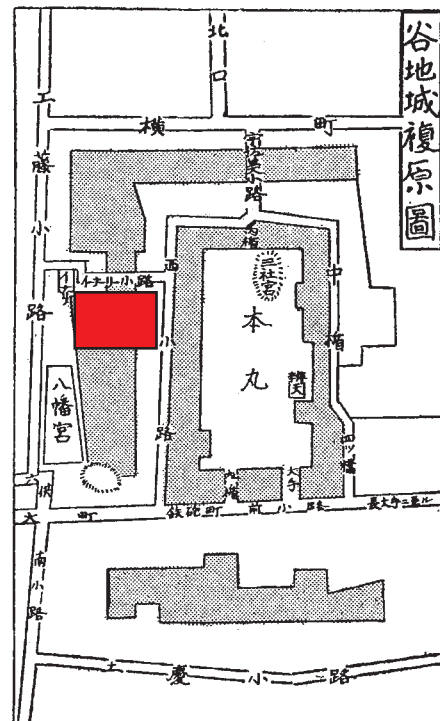


図2 谷地城の復元図（赤四角が調査区）

丸山茂『山形県下古城址の研究』1944



図4 遺構検出状況（南から）

3 まとめ

今回の調査によって、これまでに想定されてきた場所に二の丸堀がないことが明らかになったため、二の丸西側の復元図については、再検討する成果が得られました。区画溝の全体形については、調査区だけでは不明な点が多いのですが、いずれにせよ調査区で発見された溝跡のほとんどが、現在の町の区割りと同じ方向につくられています。これは谷地の町並みが400年前につくられてからその状態を保ち続けてきたことを示しています。河北町の歴史を語る上で、重要な成果を得た調査となりました。



図3 1689年の谷地（赤丸が調査区）

横久右衛門家文書『谷地本郷絵図』（河北町教育委員会所蔵）



図5 調査区遺構検出状況（北東から）



⑦ 漆器碗出土状況



④ 枝を敷きつめた柱穴の調査風景



② 柱の下に割材を敷いた状況が確認できる柱穴



① 石塔出土状況

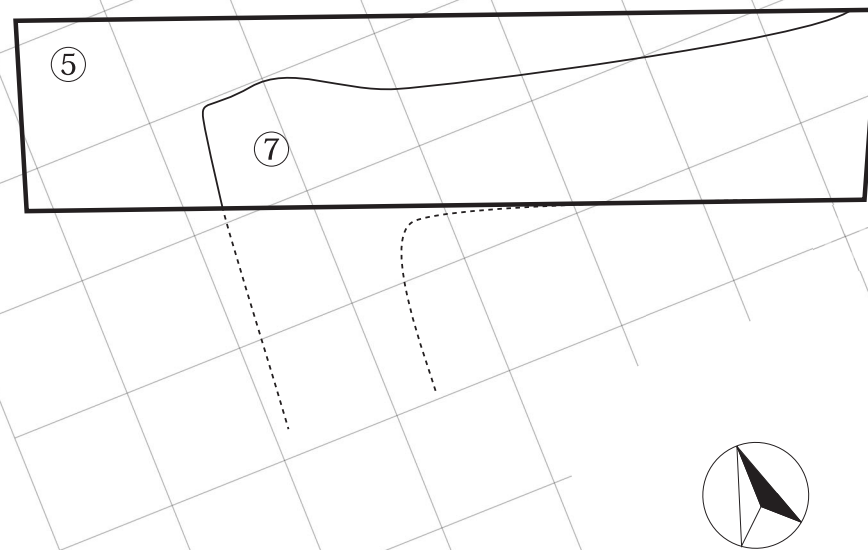


図6 谷地城跡調査区概要図 S=1/250

○数字は同じ番号の写真の撮影場所



⑤ 調査区内基本土層



⑥ SD3 溝跡堆積断面状況



③ ザル出土状況